

ストア派とペリパトス派の倫理学説に対するキケロの応答

中西 捷渡

広島大学大学院人間社会科学研究所 博士課程後期

本発表では、ヘレニズム哲学において決定的な対立に陥ったストア派とペリパトス派（ないし古アカデメイア派）の倫理学、とりわけ幸福論に対してキケロがどのように応答したかという問題を考察した。

キケロが倫理学分野での主著の一つ『善と悪の究極について』で取り上げる問題は、幸福と徳、また幸福と他の善いものとの関係という古代倫理学の根本的な論点をめぐるストア派とペリパトス派の論争である。ストア派の理論では、有徳であることは幸福の必要十分条件であり、財産や友人、健康等の精神の外に存する善いものは幸福には一切貢献せず、しかも、それらの善は時として有益であり得ても、真の意味では善でないとされる。これに対して、ペリパトス派の主張では、外的な善も幸福の構成要素であり、徳だけでは不完全な幸福しか得られないとされる。このような両派の対立において、キケロの整理によれば、ストア派の理論は一貫しているが直観的に受け入れがたく、ペリパトス派の理論は直観に合致するが論理的整合性を欠いている、というジレンマが出現していた。

キケロは複数の著作の中でこのジレンマと格闘しているが、最後の倫理学著作『義務について』では、これを解決しないままストア派の側に肩入れしている。本発表では、この措置の理由をキケロの懐疑主義と『義務について』の政治的意図に求めた。キケロが採用するのは、真理を把握不可能とし、その代わりに、単に現状で最も有望な見解であるに過ぎない〈尤もらしいこと〉を実践上の基準とする懐疑主義である。これは、真理を巡る論争に陥ることなく、〈尤もらしいこと〉を基準とした道徳的実践の構想を可能にするものである。そして、『義務について』には、彼にとって最も有望な〈父祖の遺風〉という伝統道徳を復権させることで綱紀肅正を図るといった政治的意図があった。この意図に鑑みると、キケロは、徳のみが真に善であり有益であると主張するストア派の理論を、徳や英雄的自己犠牲を称揚する〈父祖の遺風〉に哲学的基盤を与えるとともに、主張の高邁さによって一層の求心力を付与するものとして評価していると考えられる。